

<ラウンドテーブル報告1>

学生の主体性を促す授業は自律した学習者を育てるのか

【企画者】	小山義徳	(聖学院大学)
【司会者】	馬場眞知子	(東京農工大学)
【報告者】	たなかよしこ	(日本工業大学)
	志手和行	(東京福祉大学)
	野崎浩成	(愛知教育大学)
	河住有希子	(日本工業大学)
	小山義徳	(聖学院大学)

1. はじめに

教師や上司から言われることだけを行うのではなく、自ら主体的に動き、自律的に学ぶ学習者を育てることの大切さが唱えられて久しい。しかし、具体的にどのような実践が各大学で行われているのか語られる場は少ない。そのため、大学において自律した学習者を育てるには、教員はどのような授業を行えばよいのかが不明である。そこで、本ラウンドテーブルでは、話題提供の先生方が行っている授業実践を紹介した。そして、日頃感じている実践上の課題や、改善案等を聴衆の方々の意見を交えながら議論を行った。

2-1. 主体的に学ばせる?

名古屋大学高等教育センターの「ティップス先生からの提案 (http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/faculty/index_3.html, 20120612)、「提案3: 学生を主体的に学習させる」、なかなか難しいテーマである。主体的である学習者は、誰かに何かを指図されなくても課題を発見し、問題を解決していくからこそ主体的であると言える。つまり、主体的ということ自体は、主体的であるとされることでは主体的たり得ない。

学生が主体的に動くしかけを教員が作ることは、教育が仕事である限り是としよう。しかし、教員が学生に主体的に学習させる、というのが「させる」(使役)である限り、主語は、教員であり、学生ではない。つまり、主体は学生

ではないことになる。教員がまずすべきことは、何かをサセルことなく、学生がどうかであることを知り、その環境を変えることではないだろうか。

2-2. 学生を観察する

あまりにも当たり前のことだが、教える側は教える前に学生がどのような状態であるか、レディネスを理解することが第一歩ではないだろうか。学生が「学び」をどういうものだと捉えているか、学ぶことと知ることをどう区別しているかを、教室での活動を通して何を書き、どう行動しているかを観察することで、学生の状態(レディネス)を知ることが第一歩である。(たなかよしこ)

3. 教えるという責任を負わせて学ばせる

私は学生の潜在能力を引き出せるような時間を設けることが重要ではないかと思う。言い換えると、授業内で学生に何らかの責任を負わせるのだ。授業の種類、内容によって授業方法は異なるが、90分の授業が15回実施されるということは変わらない。この1,350分の授業時間においてどれだけの時間とどのような課題という責任を学生に与えるかが大切であると考える。私なりの一つのやり方が「学生に授業をさせる」ということである。教えるという責任ある立場を学生に与えることでどのように彼らの潜在能力を引き出そうとしたのかについて実践例を交えながら具体的な議論を行っ

た。この発表に対し、「主体的な学生＝自律的な学習者になっているか」という質問があり、「1学期間のみであるが、学生が予習するようになり、授業外の学習態度・姿勢の変化がおきた」と回答した。(志手和行)

4. LMS の活用と自己調整学習

LMS (Learning Management System : 学習管理システム) を活用した授業実践について報告した。この実践は、外国人留学生在が日本語を学び、日本人チューター(学部生)が教師を務め、異文化コミュニケーション能力の向上を目指すものである。LMS を活用したアクティビティや対面交流授業を通じて、自律した学び「自己調整学習」を促すことができたのかを考察した。会場では、「主体性の主なところは時間管理なのか」という質問に対し、「そうである」と回答した。(野崎浩成)

5. 学びのきっかけを提供する

ノートのとり方や情報検索の方法、レポートの書き方といったスタディスキルのトレーニングを行い、そのスキルを用いる課題を出すと、学生はその範囲において課題を「こなす」ことができるようになる。しかしここで学んだ(と学生が感じている)ことが、他の課題にあたったときにも生かされるかという点、必ずしもそうとは言えない。目の前に課題があり、その課題に気づくこと、課題を分析すること、自分にとるべき行動を考えること、そして行動することの中で、学んだスタディスキルがどこでどのように生かされるか、ということを経験的に学んでいないからではなかろうか。

大学生の生活の中には、スタディスキルに焦点化したトレーニングだけではなく、主体的に行動するチャンスがたくさんある。どのようにそれらと授業を関連付け、学生に学びのきっかけを提供することができるかについて、実践例を報告しつつ議論した。参加者から「成果はどのようなかたちで出ているか」という質問があり、「学生が書く文は携帯、ゲームなど良く知っているものについて。何十ページにわたるも

のもある」と答えた。(河住有希子)

6. 学生の「問う力」を伸ばす実践

考える力とはどのような力であるのだろうか。本発表では考える力とは「問う力」と定義して、学生の「問う力」を伸ばす実践を紹介した。なぜ「問う力」を伸ばす必要があるのだろうか。人は「問う」と、「答えを探求」したくなる。「答えを探求」としてそこで、「学び」が産まれる。「学び」が産まれると、新たな「問い」が産まれるというように「学びのサイクル」が機能する。つまり、「問う」スキルを伸ばすことで、自ら問いを立て、探求し、学ぶ学習者を育てることができると考えられる。そこで、本実践では、学生に「問う」トレーニングを行うことで、「問い」の質と量がどのように変化してきたかについて報告した。参加者から「良い問いをゴールにするのではなく、問いを展開していく気持ちよさを感じとれるかを大事にしたらどうか」というコメントがあった。(小山義徳)

7. 全体を通して

全体を通して、参加者から「学生が孤立しないコミュニティをつくる。相談する。コミュニティに参画するということも必要」といった意見や、「選択が出来ない学生に対してのカリキュラム構成の必要性」、「初年次だけで終わらせてはいけない。大学は社会への出口である」、「そもそも主体性と自律性の関係についての議論をしておく必要がある」等のコメントを頂いた。当日、参加して頂いた皆様、質問、コメントを下さった方々、大会運営委員会の皆様に感謝申し上げます。